

届け 世界の果てまでも

令和2年 8月28日
No. 27
文責 校長 飯久保一男

自分をよく知ること

うさぎとかめ

石原和三郎 作詞

納所弁三郎 作曲

1 もしもし かめよ かめさんよ
世界のうちで おまえほど
あゆみののろい ものはない
どうしてそんなに のろいのか

3 どんなに かめが いそいでも
どうせ ばんまで かかるだろ
ここで ちょっと ひとねむり
ぐうぐう ぐうぐう ぐうぐうぐう

2 なんと おっしゃる うさぎさん
そんなら おまえと かけくらべ
向こうの お山の ふもとまで
どちらがさきに かけつくか

4 これはねすぎた しくじった
ぴょんぴょん ぴょんぴょん ぴょんぴょんぴょん
あんまり おそい うさぎさん
さっきの じまは どうしたの

道徳で「うさぎとかめ」の話や童謡をもとに授業をしたことがあります。日本では、この話の教訓は「油断大敵」とか「地道にコツコツと歩むことが大切」とされていますが、なぜ、かめは、自信のない「かけくらべ」で、それが得意なうさぎに勝負を挑んでしまったのか？ このときのかめの心理を考える授業を仕組みました。



この「うさぎとかめ」の話は、人と人が関わるときの心理をよく表しています。

○うさぎは、かめのことを見下しています。認めていません。

○かめは、そのうさぎに自分の自信のないこと（生まれ持った能力で劣っていること）で、「なんとおっしゃる うさぎさん」と挑んでしまうのです。

多くの人は、自分が周りからどう見られているのか気になります。その中でも、自分を認めてくれない人のことは気になりがちです。自分のいいところをわかってくれる人が周りにはいるのに、自分をわかってくれない人が気になってしまうのです。特に、自信がないときは、わかってくれない人ばかり見てしまうのです。

かめに対して

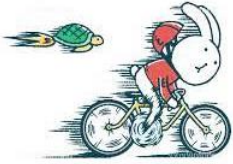
- あなたは、泳ぎが得意でうらやましい。
- あなたは、水に長い間もぐっていられてすごいですね。
- あなたは、長生きできていいですね。



と、かめのいいところを認めてくれる動物は、周りにはいるはずなのです。しかし、かめは、かめのいいところを見てくれる動物には気がつかないのです。そして、うさぎから見下されると、「なんとおっしゃる！」と相手の得意なこと、自分の劣っていることで勝負してしまい、つらいことをがんばってしまうことになるのです。

自信のあるかめ・自分の得意とすることをよくわかっているかめならば、「どうしてそんなにのろいのか」と言われても、「そうですけど何か？」と相手にしないでしょ。または、「泳ぎで勝負しませんか」と反論することもできたかもしれません。

自分をわかってくれない人に、わかってもらうために、自分のいいところを忘れてしまう、これは、人が自信をなくしたときに陥る心理状態です。



この話の続きを考えた人がいます。もちろん正式な童話ではありません。その人が勝手に考えただけです。正式な話の続きではありません。かめとうさぎの母親も登場します。

うさぎとかめ 続きのお話

うさぎとかめは、もう一回かけくらべをすることになりました。うさぎは、今度は油断しなければ絶対に勝てることを知り、実力どおりに、かめに勝ったのでした。

うさぎとかめは、一勝一敗の引き分けになりました。そこで、うさぎはもう一度勝負をして決着をつけようとかめに言ったのでした。そして、うさぎは

「何も道具を使ったり、何かに乗ったりしてはいけないよ。」

と条件をつけたのでした。かめはこのままでは負けてしまうのは目に見えているので、困りはてて、次の日に勝負をすることにして家に帰ったのでした。

家に帰ったかめは母にどうしようかと相談したら、母から

「自分をよく知ることです。」

と言われました。母はそれ以上話してくれませんでした。かめは母の言葉の意味を考えて、あることを思いつきました。

そして、翌日、かめはうさぎに

「うさぎさんが条件をつけたのだから、私も一つ条件をつけていいですか？」

とうさぎに聞きます。うさぎは

「何でも聞いてやるよ。」

と言いました。かめは

「勝負する場所を私に決めさせてください。」

と言い、うさぎもそれでいいと言いました。かめは、海に浮かぶ、はなれ小島を指さして

「あの島をゴールにします。」

と言ったのでした。うさぎは昨日、かめに、何も道具を使ったり、何かに乗ったりしてはダメと条件をつけてしまったことで、泳ぐしかありませんでした。勝負は泳ぎが得意のかめが勝ったのは言うまでもありません。

勝ったかめは家に帰って、母に勝ったことを伝えたら、母は

「自分のことをよく知ることができたのは、誰のおかげなの？」

とひとこと言ったそうです。

うさぎも泣きながら家に帰り、母にくやしさを伝えたら、母は

「自分の足りない部分を教えてくれたのは誰なの？」

とひとこと言ったそうです。

うさぎもかめも、相手がいたから、互いに学ぶことができたのです。



この話のかめの母親も、うさぎの母親も、子どものことをよく理解しているステキな親だなと感じました。小学生の子どもたちどうしの関わりは、お互いに未熟なことがあります。自分のよさや相手のよさを理解していない場合が多くあります。相手のいいところよりも、苦手なことが目についてしまいがちです。そこでの親や教師の役割は大切ですが、子どもたちどうしが関わり合う中で、自分のよさを知り、相手のよさを知ることで得られる自信（自己肯定感）はより確かなものになります。そういう子どもたちの関係を見守り、応援する親であり教師でありたいと思っています。

自己肯定感についてはまた後日のこの紙面で…